

## 国際協力特別賞

### 地域の色を守る

五ヶ瀬中等教育学校 6年  
遠目塚 優

2年前、私は学校の海外研修でバングラデシュを訪れた。

飛行機から降り、長旅で疲れた体を引きずって空港の中を歩いていると、驚くべき光景を目にした。1匹の猫が歩いていたのである。突然の異国感に自然と笑みがもれ、胸が高鳴った。空港から出るとクラクションの嵐だった。渋滞の車の間を縫うようにリキシャという派手な人力車が走っていく。見るもの全てが初めてで、においも音も初めてで、私はずっと車内から外を見ていた。肌で感じる異国感は、私に、ここにしかない地域性を強く感じさせた。

2日目、私はガタガタ揺れる飛行機でジェソールへ向かった。アジアヒ素ネットワークが行っているヒ素公害対策事業について学ぶためだ。宮崎県の土呂久鉦山で起こったヒ素公害を教訓に、アジア各国のヒ素公害をなくす目的で結成されたこの団体は、今ではヒ素以外のさまざまな支援も行っている。中でも私が興味を持ったのは、NCDプロジェクトと呼ばれる事業だ。これは生活習慣病のリスクを減らすことを目的とした事業だ。私は、発展途上国であるバングラデシュに生活習慣病があることに驚いた。決して裕福とはいえない生活を送る彼らが、なぜ生活習慣病にかかるのか、その原因は、この国に根ざす食文化にあるという。私は、それまで自分が心を躍らせていた地域性がこの国の人々を苦しめているということを受け入れ難く思った。

しかし、現地で食事をすると、それは明白だった。昼食の時間、私の前に置かれたのはインディカ米の山と、カレーだった。野菜はない。現地スタッフはこのパラパラのお米にさらさらしたカレーをかけて手で混ぜながらもりもりとおいしそうに食べる。私も彼らをまねて食べてみた。初めての味と食感にとまどう私をよそに、インディカ米の山は現地スタッフにより崩され、あっという間に平らな皿だけが残った。その後、私は現地の学校を訪れた。そこでは、ミスティというお菓子が出された。口に入れて、思わず一緒に来ていた友人と顔を見合わせた。甘い、とにかく甘いのだ。食べると舌のつけ根がきゅっとなってざわざわと鳥肌が立つほどだ。あわてて紅茶を飲んだ。が、この紅茶も甘い。スプーンで混ぜるとカップの底で溶け残った砂糖のざらざらとした感触があった。この地域に根ざす糖質を多く摂取する食文化こそがバングラデシュで生活習慣病の多い一因であることを痛感した。

地域食が生活習慣病を引き起こしている。ならば、その地域食をなくすべきか。私が出した答えはノーだ。確かに、私にとってそれらが全ておいしかったとはいえない。しかしそれらは、私にバングラデシュという国を教えてくれた。食べ物に限らず、私は現地で見たもの、嗅いだにおい、聞いた音、全てがバングラデシュをつくっている。それを課題解決のためだけにながしるにすることはその地域の個性を奪う悲しいことだと思う。文化を守ることと課題を解決することはど

ちらもゆずることのできない大切なことだ。

NCD プロジェクトでも、文化を守りつつ健康な食生活を推進している。例えば、食事の内容は変えず、しきりのついた皿で量とバランスを適切なものにするということを提案している。私はこの活動の考え方に深く共感し、いつかこのプロジェクトに参加することを約束してバングラデシュを後にした。

あれから 2 年、私は学校で地域食の研究を行った。私の周りの地域にも今にも消えそうな地域食がある。私はそれを受け継ぎ、守っていこうと思っている。

世界はグローバル化が進み、それとともに価値の単一化も進んでいる。人が場所や環境に左右されないのはとても便利なことだ。しかし、地域の文化や特色まで同じ色で塗りつぶしてはいないだろうか。私は、そんな世界中の地域らしい色を守れる人になりたい。